



〈研究主題〉 主体的に学びに向かう姿を育てる授業づくり ～教師による子どもの「見取り」に焦点を当てて（2年次／2年計画）～

今年度は、教師が児童生徒の学びを見取り、見取ったそれぞれの解釈を共有し、「授業づくりのポイント」を基にしながら、チームで主体的に学びに向かう姿を育てる授業づくりに取り組んでいます。今回は、中学部の全校授業研究会について紹介します。

中学部3年 生活単元学習 「大きく育て中3ファーム～オリジナルのフライドポテトレシピをつくろう～」

授業について

本単元は、一昨年度から継続して行ってきた畑での作業や、調理の活動で構成しており、生徒たちの興味・関心や意欲も高い。その中で相手を意識し、よりよい「フライドポテト」を提供するためにはどうすればよいかを考え、表現することをねらいとした授業である。

抽出生徒について

- ・教師の言葉掛けを受けてから活動を進めることが多い。
- ・見通しがもてると自分から活動に向かうことが増える。
- ・畑での作業や調理活動に関心が高い。
- ・話合いの場では友達の話に聞いていることが多い。
- ・話合いの前に自分の意見をまとめる時間を十分にとると、独創的な考えを発表することがある。



授業研究会から（見取りと解釈）

授業者が授業場面で気になった抽出児童の言動を「協議の視点」として設定。この視点に沿って青色の付箋紙に「子どもの言動」、ピンクの付箋紙に「解釈」を記入し、2枚の付箋紙を使いながらグループで互いの見取りの解釈を聞き合い、「次につながるキーワード」をまとめました。

視点①

個人で改善意見を書く場面、「包丁をうすくして使いやすく」と書いた。教師が「ちょうどいい薄さにするということ？」と問い掛けるとうなずいた。本意はそうだったのか。

付箋紙に「包丁をうすくする」と書く

話すより、書く方が得意だがどう表現したらよいか分からないにぎりにくかった？切りづらかった？

「うすく切りたい」と言いたい？

教師の言葉掛けに乗ったが、意味を理解できているか？

見本の中から迷わず、自分が考える薄さのものを選ぶ

私はうすくしたい！

1回目の改善ポイント「厚くしすぎて中まで火が通らなかった」の経験と「厚さ」の理解

視点②

グループで改善案を話し合うとき、友達から厚さについて同じ方向性の意見があったが、言葉が出るまで間があった。もしかして、賛同だけではなかったのでは？

友達の「もうちょっと厚く切る」の意見にはうなずかない

反対の意見だが自信はないので黙っているのか

分からない、または迷っているのか

「薄くする」の付箋を握りしめ、ワークシートを何度も見返す姿

「ちょうどよい」「厚い」「薄い」が判断しにくい？（数値や実物があればよいか）

「次につながるキーワード」

- 「実際にやってみる」「体験的な活動の設定」
- 「改善の場→調理室」
- 「経験と言葉の一致」
- 「話合いのテーマは1つに絞る」
- 「生徒に任せる、委ねる」「生徒同士のやり取り」
- 「思いや考えを引き出す発問」
- 「ゴールやねらいの明確化」



【指導助言】 秋田県総合教育センター支援チーム 指導主事 高橋 亜希子 氏

○授業全体について

- ・「繰り返しの活動の設定」
 - 「生徒が見通しをもち安心して取り組める」「繰り返す中でスキルアップしたり一人でできることが増えたりする」「やることが分かることで自分から主体的に活動に向かうことができる」などの姿が期待できる。本単元は年間を通して行っている長期単元であり、一昨年度から継続して行っている。今回の「話合い」の活動についても、毎回の話合いの流れや目的の設定などが統一され、回を重ねるごとに上達していくことが期待できる。
 - △学習のゴールの設定が課題となった。指導案の学習計画からは見えにくかった。「レシピの改善」を媒介として、子どもたちにどのような力を身に付けさせたいかを明確にしていける必要がある。
- ・「自分の考えを伝える手立てや場面の工夫」
 - 話合いの深まりをねらった意図的なグルーピングであった。その中でも生徒が意見を表出しやすいように、付箋紙に意見を書く場面が設定されていた。自分から意見を話すことが苦手な生徒にとっては、自分の考えを整理するためのワンクッションが効果的。話合いの観点として「見た目」「味」「食感」という具体的なポイントを設定したこともよかった。
- ・「導入と振り返りの工夫」
 - めあてと学習活動の流れ、頑張るべきポイントが端的に示されていてよかった。
 - △3年間継続して行っている単元。経験も積んできているのであれば、本時のめあてを生徒自身が決める場面もあってよいと思う。これまでの経験から、個人の目標のみならず、学級の仲間の視点に立って考えられるようになっていけばよい。

○抽出生徒について

- 授業づくりのポイントの「自分の考えを伝える手立てや場面の工夫」と関連が深い生徒。表情が豊かな生徒。頭の中で思いを巡らせていることがうかがえる。「豊かな表情の内面にある思いを表出しないのはもったいない」という教師側の思いも理解できた。本時では本人がもっている精一杯の言葉を駆使して伝えようとしていた。その思いを受け止めた上で教師が仲介に入って思いをくみ取り、補っていたところがよかった。
- △実感を伴った振り返りと言語化をしていく必要がある。体験的に学んでいくことが重要。
- △生徒同士のやり取りを期待する場面で教師の仲介が多かった。やり取りを促すのであれば、話合いの中で生徒同士に委ねる部分を絞り、話し合う点を明確に決めるなどする必要があった。
- △本単元で目指す姿について。単元終了時にどのような条件下でどんな姿が見られるようになることを目指すのか。具体的な姿を想像することで、主体的な学びに向かうためのプロセスが更に具体的になる。

○今年度の研究について

- ・「子どもの見取り」というのが授業づくりの根拠になる部分。身近な教師の見取りに加え、客観的な見方に立ち返って考えてみることで、より生徒の実態にせまることができる。たくさんの手立てを考え、講じていく中で、教師の願いが先走ってしまわないように心掛けることが必要。子どもの主体的な姿を求めるのであれば、やはり子どもの「姿」「気持ち」を尊重し、理解しようと努めることが大切。ここを原点として授業づくりをしていくことが求められている。「見取り」をしていく中では、少数意見で大きく取り上げられないものも出てくる。場合によっては、そのような少数意見が、子どもの成長のヒントとなる可能性もあることを心に留めて「見取り」を重ねていくことが必要。
- ・自立活動支援シートからも「伝える」ことに重点が置かれている生徒と見受けられる。自立活動は教育活動の下支えであるものであることを鑑み、授業及び本時のねらい等との整合性が取れるように改善していく必要がある。
- ・「単元構想シート」は、生徒の実態把握から授業づくりの根拠となる重要な取組である。日々の授業づくりや年間指導計画と合わせて整合性が取れたものになっているか、常に見直しをしていく必要がある。

授業研究会後の授業から（授業へのフィードバックと生徒の変容）

○繰り返しの調理活動で経験を積む場面の設定

→回数を重ねることで、準備や片付け、調理の手際がよくなった。「次はボウル（に入れる）」と次の工程をつぶやくなど、活動を繰り返したことで見通しや自信をもち、自分で考えて活動に向かう場面が増えた。

○教師の仲立ちを意図的に減らす手立て

→困っている様子が見られても、教師は意図的に言葉掛けせず、生徒同士のやり取りを見守った。調理場面では、長い時間同じ役割を担当したことで手が疲れたときに、友達の様子を見て「疲れた」と伝え、友達の「代わろうか？」の言葉掛けを受けて交代する姿が見られた。また、調理器具を準備する際、友達が用意したものを見て不足分を準備するなど、より友達を意識して協力しようとする様子が見られた。

○実際の調理場面の中で「薄く」「厚くする」「ちょうどよい厚さ」などの言葉の理解にせまる場面の設定

→実際にじゃがいもを切る活動の中で「このくらいの薄さだとよさそう」「もう少し薄く切りたい」などの発言が見られた。友達が切る様子もよく見て、薄く切れているときにうなずいていた。

